

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 新井 保裕

新井保裕氏の博士論文「携帯メール言語研究—日本語と韓国語の対照を通じて—」の審査結果について報告する。

本論文は、携帯電話で送受信されるメールで使われている文字言語を「携帯メール言語」と称し、日本語と韓国語の携帯メールを対象にして、特にその「文字の使われ方」に焦点を当て分析を行おうとするものである。「人はなぜ携帯メールを使用するのか、なぜ携帯メール言語の中に特徴的に見られる脱規範的な表記を使用するのか」という問いかけをもとに、日本語と韓国語の携帯メールの分析から両言語の共通性と相違性を明らかにすることによって、携帯メール言語の普遍性と多様性を探るとともに、携帯メール言語などインターネットを媒介した文字言語の特徴について考えようとしている。

本論文は8章からなり、序章では日韓携帯メール言語の先行研究を概観し、本論文での研究方法を提示している。これまでの先行研究の問題点として、事象の記述・観察に留まっていること、対照研究の数が少ないことを指摘し、本論文では実際に書かれた日本語と韓国語の携帯メールを収集し、そのデータを様々な観点から分析することにより、携帯メール言語の特徴を明らかにするとしている。

次の2章と3章では携帯メール言語の静態研究を行っている。2章では携帯メール言語の特徴を、言語学、メディア論、技術論の三つの観点から明らかにしている。まず言語学的には「書かれた話しことば+脱規範的な表記」が特徴であること、メディア論の観点からは音声コミュニケーションに近く、時間的な余裕があることが特徴であること、さらに技術論の観点から、携帯メールが脱規範的な表記が生成され、「文字遊び」が行われる環境であることを確認している。

3章では携帯メール言語に特徴的な脱規範的表記を、形式、機能、実現方法の三つの側面から見ている。まず、形式面の分析を通じて、日韓で用いられる文字とその体系、表記法の違いが反映され脱規範的表記の様相が異なって現れることを示し、機能面からは、日韓共に脱規範的表記が音声言語として実現可能な「意味」と、音声言語では十分実現できないあるいは実現不可能な「効果」、という二つの機能を備えることを指摘している。さらに、類型別に脱規範的表記数を数え、その日韓対照を行った結果、日本語にはヴィジュアル・コミュニケーションへの志向性、韓国語にはハングル中心的利用傾向が見えることを明らかにし、脱規範的表記の使われ方には各言語の「文字の使われ方」の傾向が反映されることを指摘している。さらに、「文字の使われ方」はこれまでの文字論の先行研究で扱われることのなかった分野であり、「文字活用論」として文字論の下で研究していくべき課題であることを示した。

4章から6章では、事象の観察・記述に留まらず、動的な観点から研究を行っている。まず4章では携帯メール言語使用の前段階として、携帯電話における通話とメールの行為選択に焦点を当てて日韓の対照研究を行っている。アンケート調査の結果から、日韓共に連絡対象の待遇度、親疎度、連絡重要度が行為選択に影響を与えており、それらが低くなるほど相対的にメール志向が強くなることを明らかにした。このことから、メールは各種要因に基づき規則的に利用されており、それは連絡メディアの使い分けによる情報行動の待遇法とも言えるものだと述べている。ただし、日本では場面心理負担度、韓国では情報提供量が行為選択に大きな影響を与えるなどの違いも現れており、国による行動の違いも見られることも指摘した。

5章と6章では書き換えテストで得られた携帯メールのデータをもとに、脱規範的表記比率という計量化基準を用いて、脱規範的表記の使われ方を分析している。まず5章では送受信者の性別に焦点を当てて分析し、①韓国語の方が日本語よりも脱規範的表記が定着している、②日韓共に女性が多く使用している、③男性が女性に送る際には、女性のコミュニケーション・スタイルへシフトする傾向が見られる、④表現

性効果の表し方には日韓あるいは性別による差がある、という四点を明らかにした。さらに場面別の分析を行い、⑤日韓共に高心理負担度場面では規範通りに表記する傾向がある、⑥韓国語の謝罪場面では、男性による、女性のコミュニケーション・スタイルへのシフトが起こる、⑦韓国語のみ表現性効果の表し方に場面差があることを明らかにしている。

さらに6章では、謝罪場面についてさらにデータを集め、そのデータをもとに、受信者年齢、受信者親疎、場面連絡重要度という三つの変数から日韓対照分析を行っている。その結果、日韓共に待遇度が低くなる、または親疎度が高くなると相対的に脱規範的表記が用いられやすいことを明らかにした。このことから、脱規範的表記は、相手との人間関係に基づいて規則的に使い分けられており、既存の待遇法の応用形であると指摘している。さらに、連絡重要度に関しては、韓国語においてだけ重要度の高い場面で脱規範的表記が多く用いられており、脱規範的表記は、日本では装飾的表現性効果が強いのにに対し、韓国では実践的表現性効果が強いと述べている。

7章では、4～6章の分析結果をポライトネス理論の観点から分析している。これまでの分析結果から、言語行動と情報行動には異なるベクトルが働いていることが明らかになっているが、これはP要因とD要因を統合させたハンバーガー・モデルにより統一的に説明できることを指摘している。もともと携帯メールは、通話を用いた場合、配慮が過剰あるいは過小になってしまう状況で、適正な配慮を行うために選択されるようになったと考えられ、さらに脱規範的表記という視覚的手段を用いて、コミュニケーションを補強するとともに、一方で通話が持たない機能を備えるようになってきていると説明している。

さらに、日韓の異同については、携帯メールの脱規範的表記がコミュニケーションのために体系的に用いられている点は日韓の共通点であること、他方、その使い方には、用いられる文字とその体系、表記法、日常のコミュニケーション・スタイルなどが反映されるため、日韓の相違点となっているとまとめている。

8章では本論文で明らかにした点をまとめるとともに、本論文が計量言語学、対人行動分析、文字論、日韓対照言語学などの分野において意義を持つことを指摘し、さらに今後の課題・展望について述べている。

本論文の第一の意義は、まず携帯メールの特徴である脱規範的表記を計量化し、その使い方と年齢、親疎、場面重要度との相関を分析することにより、脱規範的表記使用のメカニズムを明らかにしたことである。さらに、日本語だけでなく韓国語も対象とし、詳細な対照分析を行っていることが本論文の第二の意義である。日韓対照分析を行うことにより、両言語ともに脱規範的表記の使用が体系的に行われていること、同時に文字や表記法の違い、あるいはコミュニケーション・スタイルの方法の違いが脱規範的表記の使用に影響を与える可能性を示し、この種の現象を普遍性と個別性の観点から考察したことは、新たな研究成果と言えよう。本論文は、従来本格的な研究が少なかった通信やインターネットを活用したコミュニケーション言語の研究を確実に進めるものであり、その成果は社会言語学だけでなく、計量言語学、文字論の分野において有用なものである。

審査においては、携帯メールを取り上げた理由が不明確であり、本論文で明らかになったことがどこまで一般化できることなのか、他の様々なメディアにおいても言えることなのか、などより広い視点から本論文の研究内容を位置づける必要があること、文字の使われ方を「文字活用論」というとらえ方をしているが、その内容については漠然としておりさらに検討が必要なこと、前半に脱規範的表記に関して詳細な分類を行っているにもかかわらず、後半の量的な分析ではそれが十分生かされていないこと、日韓の対照分析に関しては計量的な観点だけでなく、質的により詳細な分析が必要であること、など今後検討すべき様々な課題も指摘されたが、それらが本論文の価値を損ねるほどのものではないことが確認された。

したがって、本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。